

【学会レビュー】

ディケンズ・フェロウシップ日本支部 2008 年春季大会

(於：江戸川大学, 2008 年 6 月 7 日)

松 村 豊 子

青葉若葉が眩しい初夏の 6 月 7 日午後、本学においてディケンズ・フェロウシップ日本支部の春季大会が開かれた。研究発表が 1 つ、講演が 2 つ。今回は講演者二名が共にイギリス人ということで、国際大会の様相を呈したのだが、合間の休憩時間に参加者 (62 名) が A 棟 8 階からの緑溢れる眺望とゆったりした時間を堪能したせいか、例年よりも落ち着いた雰囲気の中で大会は進行した。

大会開催前に、まず、市村佑一学長から開催校挨拶のお言葉を頂いた。ディケンズ・フェロウシップとのかかわりをご自身の豊富な経験から語られた講話では、元日本支部会長の小池滋氏と大学の同窓であること、また、共に鉄道ファンであることを告げられ、『二都物語』をふまえ、ヨーロッパを訪れる日本人ビジネスマンがパリ派とロンドン派に二分されることを興味深く語られた。これは小池滋氏を敬愛する会員が大多数をしめる本学会会員を少なからず感動させたようで、大会終了後、感謝のお手紙を数人の参加者から頂いたほどである。

最初に行われたのは、寺内孝氏の「ディケンズの 3 小説 *David Copperfield*, *A Tale of Two Cities*, *Great Expectations* を読む」という研究発表だった。寺内氏はディケンズの作品を伝記研究の観点から読み、ディケンズと彼の妻キャサリンの別居騒動が上記 3 作品に与えた影響について発表された。寺内氏のディケンズに対する情熱が伝わる発表だった。

次の David Chandler 氏の「*The Cricket on the Hearth in the Italian Opera House*」と題した講演では、『炉辺のおおろぎ』という中篇小説が 20 世紀初頭のイタリア・オペラに与えた影響が当時の貴重な視聴覚資料を利用しながら論じられた。チャンドラー氏の英語は簡潔明快で、イタリアで 100 年前に制作されたイタリア版『炉辺のおおろぎ』の映画紹介においても資料の意味深さが十分にフロアに伝えられた。

最後に、Michael Pronko 氏の「*En-visioning Dickens: early silent and sound films*」という講演があった。プロンコ氏は 1930 年代に映画化されたディケンズの短編及び長篇小説に注目し、読者が活字版より先に映像版でディケンズ作品に接する可能性が高い今日における映画研究の重要性を説かれた。講演中に紹介された無声映画の美しさが感動的だった。佐々木徹氏の英語による軽妙な司会も印象的だった。

大会終了後、柏クレストホテルで開かれた懇親会では、2012 年のディケンズ生誕 200 年祭にそなえ、日本支部でも英語論文集を世にだそうという企画案まで飛び出した。

大会実行委員として、本大会が無事に幕をあげ、盛況のうちにとじることができた背景に、大学からの多大な資金及び人的援助があったことを付け加えたい。情報文化学科の諸先生方ならびに事務局の皆様にご心からお礼申し上げたい。